

冠動脈新規小血管病変に対する薬剤溶出性バルーンの使用成績

【背景】2016年6月に薬剤溶出性バルーン(以下 DCB)が冠動脈小血管病変に対して臨床使用が可能となった。これまで小血管病変の治療に難渋してきたが、DCBの使用が可能となったことで治療戦略が大幅に広がった。Basket-Small 2 trialより血管径3mm未満の小血管においてDCBは第2世代のDESと比較し、臨床結果に関して非劣性であると報告されている。【目的】新規小血管病変に対するDCBの治療成績を検討する。【方法】名古屋・豊橋ハートセンターにおいて2014年4月から2018年8月に、2.75mm以下のDCBを用いた新規小血管病変のうち冠動脈造影にてフォローアップし得た連続355病変を対象とし、12ヵ月の臨床成績を検討した。【結果】再狭窄率は19.4%、TLRは5.4%であった。多変量解析では、suboptimal result、calcified lesion(Moderate以上)が独立したTLRの予測因子であった(suboptimal result; OR=4.41、95%CI=1.082-18.00, p=0.039, calcified lesion; OR=3.71、95%CI=1.519-9.064, p=0.004)。【結語】小血管に対するDCBの臨床成績はTLR5.4%と比較的良好と考えられた。TLRの予後予測因子はsuboptimal result、calcified lesionであった。